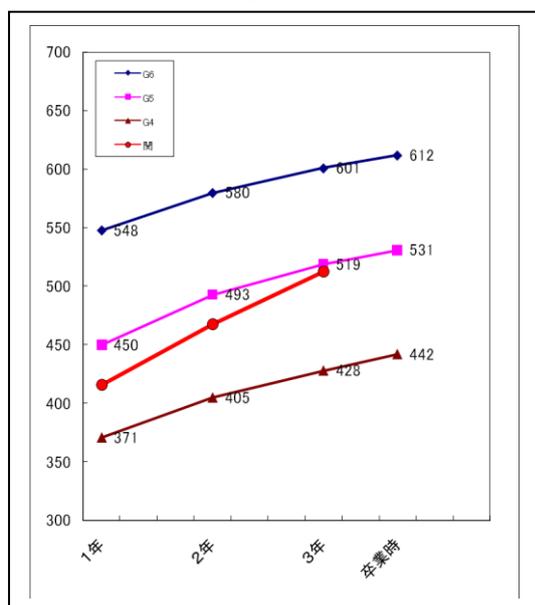


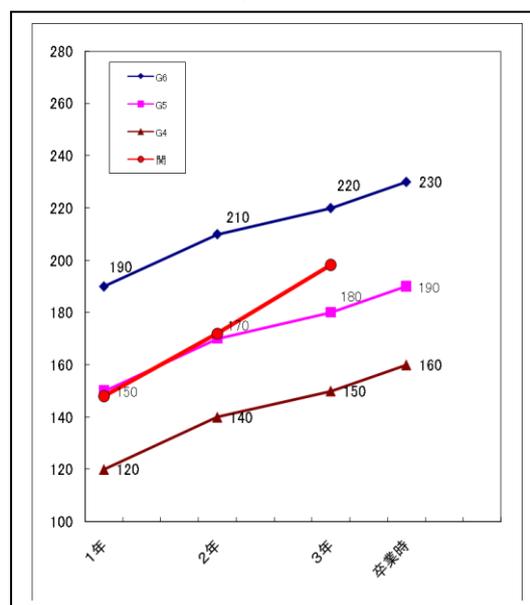
英語力向上アクションプラン「小中高英語指導改革プロジェクト」 研究協力校における取組

高等学校	岐阜県立関高等学校
研究期間	平成19年度～平成21年度
研究主題	「実践的コミュニケーション能力を養う英語指導法の研究」
研究方法	GTECを3年間受験することにより、英語運用力の変遷を客観的に把握しながら、アクションリサーチの手法を用いて、効果的な指導内容・指導方法を実践的に研究する。

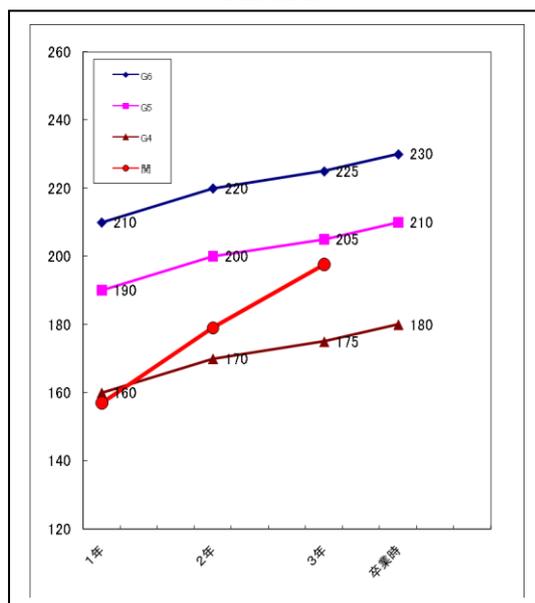
TOTAL



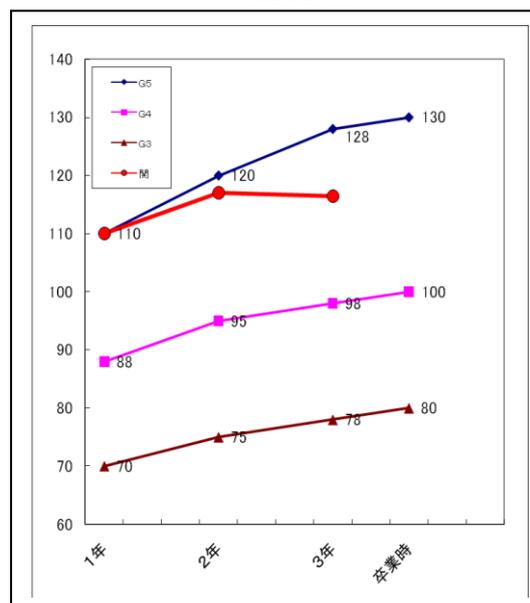
LISTENING



READING



WRITING



1 1年次の取組

(1) 研究テーマ

- ・読解力を高めるための語彙力の向上
- ・「聞く」「話す」場面の設定
- ・概要・要点把握、要約等の「総合的な学習」の導入

(2) 生徒の現状

- ・生徒の学力の幅が広く、全国偏差値（進研模試）では83～34までの開きがある。
- ・週3回の単語テスト（1回20単語ずつ）では合格するが、範囲が広い定期考査・実力テストでの単語に関しては点数が取れない生徒が多い。
- ・下位層の中には、何をどのように取り組むべきか、学習方法が分かっていない生徒も少なくないように思われる。
- ・一文一文の意味は理解できても、パラグラフ、パート、レッスン全体の意味の把握ができない生徒が多い。
- ・苦手意識があり取り、取り組みが消極的な生徒も少なくなく、音読活動が十分できないクラスもある。
- ・週末課題、小テストの追試等を期日までにできない生徒がいる。

(3) 研究テーマ設定の理由

習熟度に幅があり、それぞれの層に対する対策が必要である。語彙力の不足と基礎的文法知識の習得途上であることから、全体的に読解力が不足している。(高校入学以前の英語学習において、ある程度の分量を伴う語句等を暗記することに慣れていない。) また、質問紙調査により「総合的な活動」、具体的には概要・要点把握、要約等、出口の活動に取り組めていないことがわかった。

(4) 研究の内容と実践

ア 仮説テーマ

- ・全ての生徒に基本単語1500語を習得させるために月例単語テスト「Word Marathon」を実施することによって、語彙力向上への意識が高まるのではないかと。
- ・週1回のALTとのチームティーチングで「聞く」「話す」環境を積極的に設定することによって、「聞くこと」「話すこと」の能力が向上するのではないかと。
- ・レッスンの最後に要約等の「総合的な活動」(※資料1)を取り入れることによって、学習した内容の定着が進むのではないかと。

イ 実践

- ・授業で行う週3回（1回20語）の単語テストに加え、1回100語以上の「Word Marathon」を実施し、合格点を80点に設定し、不合格者は合格するまで取り組むように設定する。[英語Iの授業]
- ・身近なトピックで*スピーキングライン(※資料2)を行う。スピーキングラインに取り組む前に、ブレインストーミングをグループで行う。[OC Iの授業]

- ・レッスン全体の要約文（穴埋め）を完成させる。[英語 I の授業]

資料1 レッスン最後に要約等の「総合的な活動」

生徒達が関高校での英語学習に慣れてきた9月、要約活動を取り入れた。まずは「まとまった英文を読んで理解する」活動のconsolidationとして「要約活動」を位置付け、さらにはその要約から自分の思いを（自分の言葉で）発信する自己表現活動（2年次のライティングにつなげる）につなげていくというねらいがあった。

1年生のこの時期に、始めからこの課題に適応できる生徒はクラスの4分の1程度である。多くの生徒にとっては、要約はまだまだ難しい活動である。生徒が負担感をもち、「英語は難しい！」と感じさせては半年間の努力が泡と消えてしまう。そこで、要約文をあらかじめ別の活動の中で生徒に与えることにした。①～③の活動を通して、生徒の頭の中に、知らず知らずのうちに要約文を刷り込むことにした。

- ①速読の確認として、レッスン全体の要約文を提示する。
- ②各パートの理解としてトピックセンテンスを問うQ and Aを実施する。
- ③各パートの内容確認として各パートの要約を提示する。

①～③の活動で、生徒は要約に必要な英文に何度も触れることになる。また内容理解を充実させるために、ペアリーディングを活動の中心に据えた。スラッシュリーディングや穴あきリーディングをペア活動で実施することで、「音読する力＝意味を理解する力」を体験を通して実感させる取組とした。

レッスン最後の活動として、「100語で要約」することを課題とした。多くても少なくとも難しくなる要約。100語で十分であるとの段階では割り切る。別の言い方をすれば、key sentence を10文つなぎ合わせることで要約になる。また別のいい方をすれば、初めに与えたレッスン全体の要約を半分に分ければよい。制限時間は15分。さらにそのレッスンにふさわしい条件を2つ、3つ付け加えれば、「やればできる要約」、「僕にも私にもできる要約」となる。1年生のこの段階では、ペアリーディングこそ大切で、要約については、「15分で書いてみよう！」で十分である。ただし、ノートかプリントに生徒が書いた要約をチェックすることは教師にとっては最重要任務である。中学英語から高校英語への橋渡しがうまくいったのか？一人一人の生徒の理解度がどの程度なのか？この活動のねらいは実はここにあるのだから。

【具体例】 教科書：UNICORN ENGLISH COURSE I（文英堂）Lesson 4 LIFE IS SO GOOD

- I 各レッスンの一番始めの授業は、生徒がまだ予習をしていない段階で、突然次のレッスン全体を読む活動を取り入れる。その活動（全体を大まかに掴む）の確認として、レッスン全体の要約の穴埋めを実施する。

「これはLesson 4の要約です。2分間で目を通してください。」

「それではレッスン全体を読んで、（ ）内に適語を入れなさい。制限時間は10分です。」

※（ ）の前後関係から適語の品詞を確認させる。

II Part 1 を学習する。

- ① 脚注問題を利用して、アウトラインを掴む。(つなぎあわせると要約)
- ② 内容把握を実施する。
本文の内容に合うように、かっこの中に適当な語句を入れなさい。
- ③ 単語・熟語・構文のチェックをする。
- ④ シラブルリーディングを行う。(教師の指導で、クラス全体で行う。)
(CDで本文を聞いて、シラブルを確認する。)
- ⑤ ペアでシラブルリーディングを行う。
- ⑥ 確認テストを行い、すぐに答え合わせをする。
- ⑦ Part 1 の要約を利用して、穴あきリーディングを実施する。

III Part 2~4について、①から⑦の活動を実施する。

IV 「100語で要約」を実施する。

※難しさを軽減するために、いくつかの条件を与える。

- ①100語の要約=1文(およそ10語)×10
- ②Heを主語とする。(受動態は使わない。)
- ③3つのパラグラフで構成する。
- ④第1・第2パラグラフは過去時制、第3は現在時制。

※①から④の条件で難しいと感じる生徒は、以下の方法で要約する。

- ・ I で利用した文を、簡潔にまとめて書く。(余分な文をそぎ落とす。)
- ・ 各パートの学習⑦の要約文から、大切な文を選び出して書く。
- ・ 脚注問題の答えをつなぎあわせる。(Lesson4は12問)

VII オプションでリスニング活動 (教科書付属の教材を使用)

資料2 スピーキングラインに取り組んだ日の授業展開案

Speaking Lines

Aim of Activity:

Students will speak for 8 minutes about different topics. (1 minute per topic)

Warm up: BRAINSTORMING

- ・ Divide the blackboard into as many sections as there are topics. Divide the students into groups and have them brainstorm information about each topic.
- ・ After students have brainstormed you can either have each group write their info on the blackboard individually, or you can do it as a whole class activity and have the students shout out the words or phrases that they've come up with.

(this warm up should not take more than 15 minutes.)

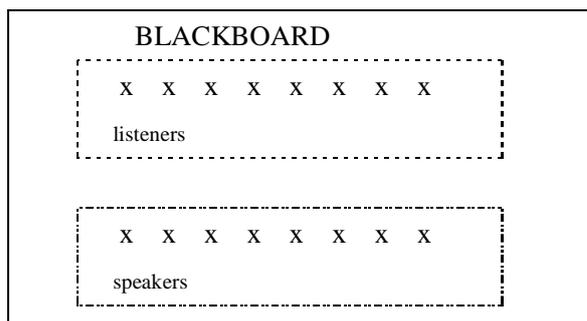
Activity: Speaking Lines

• Explain to the students that they will now have the opportunity to talk about each topic for about 1 minute.

(Note-for a small class you only need one speaking line, but for a larger class you will have to have two lines. One line can be at the front of the class, and one line can be at the back of the class.)

• Assign the number one or the number two to each student. The students who are number 1 will be the speakers, and the students who are number 2 will be the listeners.

(Refer to the following DIAGRAM for a visual explanation)



*Listeners don't rotate. They stay in the same place and listen to every student talk about the same topic.

*Only speakers will rotate.

*Listeners hold each topic. (same topics used Brainstorming Activity)

• Once students are lined up and facing a partner. Begin the activity.

• Set the timer for one minute and let the students talk to each other. When the minute is over, students must rotate to the next topic. Repeat until all students have talked about each topic and then...the speakers switch places with the listeners. Now the speakers are the listeners and the listeners become the speakers. Repeat the Activity until every student has had the chance to talk about each topic.

Materials:

- blackboard and paper for Brainstorming
- topics written on blank piece of paper
- timer

List of Topics for Speaking Lines

- Gifu Prefecture
- Japanese New Years Traditions
- The four seasons in JAPAN
- Your winter vacation
- Seki High School
- OCI Class
- Introduce yourself
- Seki City
- Your daily routine
- Your family
- Your ALT

ウ 検証

- ・ Word Marathon は1年間に4回実施した。生徒の間にも定着し、積極的に楽しんで取り組む生徒も多かった。合格するまで徹底したことにより、苦手な生徒も達成感を味わうことができた。
- ・ブレインストーミングによって、語彙が増え、自信を持ってスピーキングに取り組むことが可能となった。生徒同士でリラックスした状況で話し、聞くことができた。
- ・内容、各レッスンの Key Word となる語を空白にした要約文を利用することにより、内容理解と同時に文法事項の確認も行うことができた。また、Oral Summary においても、Key Word と同時に、使用してほしい文法事項を指定することにより、生徒も習得すべき力、目標を意識して取り組むことができた。

(5) 成果と課題

ア 成果

読解力を高めるために、語彙を増やすことを目標とし、積極的に取り組んだ。月例単語テストを定期的に行うことで、生徒自身も目的意識をもって主体的に取り組むことができた。外部模試、実力テスト等の長文の意味がつかめるようになり、語彙の重要性を実感する生徒も増え、自主的に継続し語彙を増やそうとする姿勢が多く見られるようになった。第2回の GTEC の結果からも、概要を把握することができる生徒が増えてきたことが伺える。「聞く」力については、「Oral Communication I」の授業において「聞く」「話す」場面を多く設定するように意識した結果、習熟度の高い生徒には効果が見られた。「書く」力については、英文を書こうとする意欲を養うことはできたが、まだまだ文法規則に基づいて正しく構成することができない生徒が目立った。

イ 課題

比較的平易な文法問題には対応できても、文章を正確に読み取る力が不足している。長文内の指示語の内容理解などを特に苦手とする。文法、読解共に授業を通して理解することはできるが、定着していない。継続的に学習を積み重ねる習慣に欠ける。

2 2年次の取組

(1) 研究テーマ

- ・速読・多読による読解力の向上
- ・英語を使用する場面の設定
- ・継続的な学習による、学習内容の定着

(2) 生徒の現状

- ・音読、ペア活動は極めてまじめな取組を見せる。
- ・範囲の狭い小テストに、積極的に取り組むことができる。
- ・予習の仕方が定着しておらず、「どのような疑問点を解決するために授業に臨むのか」を意識しないまま授業を受けている生徒が少なくない。
- ・週末課題、小テストの追試等を期日までにできない生徒がいる。

(3) 研究テーマ設定の理由

比較的平易な文法問題には対応できても、文章を正確に読み取る力が不足している。長文内の指示語の内容理解などを特に苦手とする。文法、読解ともに授業を通して理解することはできるが、定着していない。継続的に学習を積み重ねる習慣に欠け、苦手意識をもつ生徒も少なくない。質問紙調査より、音読の場面が減っていることがわかった。

(4) 研究の内容と実践

ア 仮説テーマ

- ・月例単語テスト「Word Marathon」を昨年度に引き続き実施すると同時に、比較的容易な文章で速読の練習を行うことによって、読解力を向上させることができるのではないかと。
- ・音読を積極的に行うことによって、読む力、書く力が向上するのではないかと。
- ・クラス全体の集団の力を高めることによって学習習慣を改善することができるのではないかと。

イ 実践

- ・「Word Marathon」の再試については、昨年度同様、放課後を利用し、全員が合格するまで試験を行った。また、速読力の向上を目指し、週4回、速読教材（市販）に取り組む。特に1ヶ月間集中的に実施する。
- ・教材にふさわしい音読のペアワーク（※資料3）の練習を取り入れる。
（毎時間授業で音読活動を10～15分間取り入れる。）
- ・ペア活動、グループ活動を意識的に取り入れる。

資料3 音読のペアワーク

音読のペアワークを組み込んだ授業例

科目：ライティング

教材：POLESTAR Writing Course Lesson1 Welcome to My Site!

- ・「目的」「原因」「理由」を表す表現を学ぶ。
- ・「グローバル・コミュニケーション」に関する語彙・表現を学ぶ。

学習の到達目標

- ・情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を伸ばす。
- ・書く能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
- ・中学時や高校1年次における既習事項を定着させ、さらに応用力を身に付ける。

以上の目標を達成するために

- 1 ライティングと他の3技能（リーディング、リスニング、スピーキング）の活動を有機的に結び付ける。
- 2 4技能を使い、「重要表現」を何度も形を変えて繰り返し定着させる。
- 3 音読と、音読によるペアワークを積極的に取り入れる。

音読によるペアワークを取り入れることにより

- 1 現在の真面目な授業態度を継続させる。

- 2 予習の定着と授業の活性化を図る。
- 3 ペアで答えを確認することにより、自分の答えに対する自信をもたせ、質問の出しやすい雰囲気を作る。

○1/2 時間目

1 モデル英文（和訳付）：導入

目 的： 本課で学ぶ表現（目的・原因・理由を表す表現）の意識付け

Website の形式の理解。インターネット、メールの中で使われる語句を学ぶ。

展 開

- a. プリントを使ったかっこ埋め問題。音声を聞いて英文のかっこを埋める。
- b. 英文の答え合わせ。指名された生徒が自分の答えを読む。教師による板書。
- c. 各自で和訳のかっこを埋め、答え合わせをする。
- d. 本課の目的の推測。かっこを埋めた部分では、どのような表現が使用されているかをペアで意見交換。

2 Key Expressions：本課で学習する大切な表現

目 的： 表現の正確な理解と定着。

展 開

- e. 教師による文法説明。生徒による質問。
- f. 音読（Chorus Reading、Read and Look-up）
- g. 暗記：個人練習
- h. 音読によるペアワーク：通訳読み
生徒Aが日本語を読み、生徒Bが英文を言う。英文がでてこない場合はAがヒントを与える。

3 Try：Key Expressions の表現を会話形式で練習

目 的： 学習した表現が活用できるようになる。

展 開

- i. 音読によるペアワーク：役割読み
①、②、③を使った練習→オリジナルの答え。
- j. 指名された生徒がオリジナルの答えを発表。

○2/2 時間目

1 Drills：1 文単位の短い文や、会話文の中での表現練習

目 的： 「目的・原因・理由」を表すための様々な書き方を学ぶ。（句と節の違い。接続詞と前置詞句の違い）

展 開

- a. 宿題の確認① 音読によるペアワーク：自分が書いた文を相手に読み、互いの答えを確認する。
- b. 宿題の確認② 指名された生徒が黒板に答えを書く。教師による添削

2 Exercise A : 大切な表現を使った聞き取り

目的 : 英語の音声に集中し、聞き取りのポイントをつかむ。

展開 :

- a. 英文に目を通し、どのような答えを求められているのかを予測する。
- b. 音声を2度聞いて、かっこを埋める。
- c. 指名された生徒が音読。教師による板書

3 Exercise B : 大切な表現を使った英作文

目的 : 与えられた日本語の文を、Key Expressions を含む英語で1文1文しっかり書けるようになる。

展開

- a. 宿題の確認① 音読によるペアワーク : 自分が書いた文を相手に読み、互いの答えを確認する。
- b. 宿題の確認② 指名された生徒が黒板に答えを書く。教師による添削

○+α学習

Exercise C : 与えられた条件の下での自由英作文 希望者のみ個人添削。

ウ 検証

- ・「Word Marathon」は計7回実施した。同時に速読練習を行うことにより、自分の語彙力で英文が読めることを生徒自身が実感し、語彙の重要性を再認識することができた。
- ・様々な音読方法を繰り返し行うことにより、生徒の苦手意識も低くなり、自分自身で上達を実感することができた。聞き取ることができる英語が増え、積極的に英語を聞こうとする姿勢につながった。
- ・やや困難な音読活動や小テストの答えの確認でも、ペアワークを取り入れ、教え合ったり、分からないことを解決したりすることによって、互いの伸長を確認しあう楽しい活動となった。互いのよい刺激にもなった。

(5) 成果と課題

ア 成果

昨年度こだわって取り組んだ月例単語テスト「Word Marathon」や、概要・要点把握、要約等の「総合的な活動」を継続して行うことを前提とした上で、読解力の弱さの克服、学力の定着を目標に計画的に取り組んだ。所属学年スタッフ全員が、最後まで粘り強く徹底した指導を行うことにより、生徒側も徐々に真剣に受け止め学習に向かうようになった。

イ 課題

語彙は着実に増えつつあるが、語法まで意識を払って正しく使うことができない。読解問題では簡単な類推を行ったり、はっきりと提示されている情報を探し出したりすることはできるが、英文の主旨、詳細部分の要点まで理解することは難しい。英文の構造を理解しながらじっくり読み進める意識に欠け、知っている単語を頼りに感覚で理解し満足している生徒が多い。

上位層の生徒は、複雑な文法・構文を含んだ英文の和訳、指示語検索、文章全体の要約等の記述問題を苦手とする。英作文に関しても、難しい語句を使おうと努力するが、文法事項を考慮しながら正しく構成していくことを不得意とする生徒が多い。

3 3年次の取組

(1) 研究テーマ

- ・英作文の添削による書く力の向上
- ・朝リスニングによる聞く力の向上
- ・語彙力の増強と速読・精読指導による読解力の向上

(2) 生徒の現状

- ・音読、ペア活動は極めて真面目な取り組みを見せる。
- ・小テストに積極的に取り組むことができ、ほぼ全員が設定された合格点を取ることができる。
- ・予習をして授業に臨む姿勢が定着しつつある。
- ・大意をつかむことはできても、正確な読み取りまではできない生徒が多い。

(3) 研究テーマ設定の理由

語彙は着実に増えつつあるが、英文の構造を理解しながらじっくり読み進もうという意識に欠け、知っている単語を頼りに感覚で理解し満足している生徒が多い。上位層の生徒でも、複雑な文法・構文を含んだ英文の和訳、指示語検索、文章全体の要約等の記述問題を苦手とする。英作文に関しても、難しい語句を使おうと努力している傾向があるが、文法事項を考慮しながら正しく構成していくことを不得意とする生徒が多い。

(4) 研究の内容と実践

ア 仮説テーマ

- ・英作文添削プリント（※資料4）を実施することによって書く力が向上するのではないかと。
- ・朝リスニングを実施することによって聞く力が向上するのではないかと。（※資料5）
- ・月例単語テスト「Word Marathon」（※資料6）を昨年度に引き続き実施することに加え、速読、精読も同時に行うことによって読解力が更に向上するのではないかと。

イ 実践

- ・英作文添削プリント（構文読解も含む）は、習熟度の高いクラスでは全員が授業の中で実施。他クラスでは希望する生徒のみ実施。担当教諭に提出し添削、解説をしてもらう。
- ・リスニングは、朝のSHRの時間（5～8分）を利用し実施。市販のリスニング教材（センターリスニング分野別と私立大学の過去問）を使用。
- ・「Word Marathon」を実施。速読は1ヶ月集中的に実施。精読は補習の時間を利用し、構文をとらえる演習を行った。

資料4 添削プリント

1. 実施方法

習熟度の高いクラスでは全員が授業中に取り組み、担当教諭が添削して授業で解説を加える。他のクラスでは希望者に課題を渡し、担当教諭が添削して直接返却し、一人一人解説、評価をする。

2. 実施時間

週に1～2回程度、6月から11月まで実施。(センター試験後も実施)

3. 教材

入試問題等から抜粋した自作教材

4. 利点および問題点

英作文では模範解答があったとしても、自分が書いた表現のどこがまずいのかは生徒だけでは理解しにくいことが多い。従って一人一人添削して解説し評価してあげる効果はかなり大きい。ただ、添削者の負担がかなりあるので、無理のない程度や方法で実施する必要がある(例えば、1番の問題のみ添削、特定の表現の箇所のみ添削、まずい表現にアンダーラインだけしてあげる、生徒同士で添削させる、奇数番号の生徒のみ添削、今回は自己添削だけ・・・など)。どんな方法でもいいので、継続して実施し続けることが一番重要だと思われる。

5. プリントの例

英語添削プリント No. 8 (月 日 () 提出)

年 組 番 氏名

英文

私の趣味は、鳥の写真を撮ることで、暇なときによく海岸へ出かけたものだ。

いつ結婚するか、子供を生むか生まないかなどは、各人の自由な判断によるべきだ。

資料5 朝リスニング

1 実施

全校体制で行う朝の読書活動において、3年生については別途内容を検討するという原則があり、それに従いその時間にリスニングを実施した。

2 期間・時間

期間 5月の第3週 ～ 5月の最終週の10日間
10月の第2週 ～ 10月の最終週の10日間
時間 8:30 ～ 8:40 の10分間

3 教材（問題冊子）

Listening Shower vol.2 (美誠社)

Listening Trial Advanced Level (文英堂)

センターリスニング実践 30min.×7 (エミル出版)

- ・10分以内で答え合わせができる問題を取捨選択する。
- ・やり残した問題はリーディングの授業でカバーする。

4 留意事項

- ・学年会で事前に担任の意志疎通を図る。
- ・朝のSHRの役割を確認し、時間の延長がないようにする。また、第1限の授業開始が遅れないように配慮する。
- ・生徒に授業で事前指導をしておき、担任には負担をかけないようにする。

5 利点

- ・1タームで80分の時間が生み出せる。

資料6 「Word Marathon」

1 実施時間

1年次 英語Ⅰの授業

- ・第1回 5月（ゴールデンウィーク後）
- ・第2回 8月（夏休み後）
- ・第3回 9月（連休後）
- ・第4回 1月（冬休み後）

2年次 英語Ⅱの授業

- ・第1回 5月（ゴールデンウィーク後）
- ・第2回 7月
- ・第3回 8月（夏休み後）
- ・第4回 9月（連休後）
- ・第5回 12月
- ・第6回 1月（冬休み後）
- ・第7回 2月

3年次 リーディングの授業

- ・第1回 4月（春休み後）
- ・第2回 5月（ゴールデンウィーク後）
- ・第3回 7月
- ・第4回 8月（夏休み後）
- ・第5回 10月

2 実施方法

- ① 合格点を8割に設定し、**合格するまで再試を行う**。（再試は放課後に実施する。）
- ② 授業の前半20分で実施。（毎日の授業で行われる単語小テストとの繋がりを意識させる。）
- ③ 生徒同士による交換採点。（その場で自分の点数を把握すること、また他の生徒の点数を知ることが、次へのモチベーションとなる。教員の負担削減。）

3 テスト形式

- ① 使用教材：授業の小テストで使用する市販のテキストを使用。本校では1年次『システム英単語 Basic』（駿台文庫）、2・3年次『ターゲット1900』（旺文社）を使用した。
- ② テスト範囲：1年・2年次は100～200語。3年次は200～300語。毎授業で実施する小テストの既習範囲から出題する。「Word Marathon」があることで、毎日の小テストに対する取組姿勢も向上する。最初は単語を覚えることが苦手な生徒が多いので、Word Marathonに対する苦手意識を持たないように、徐々に範囲を広げるように留意する。
- ③ 出題語数：50問
- ④ 出題方法：
 - (ア) 記号問題を多くする。（全ての生徒がクイズ形式で楽しく取り組める形式にする。記号問題が多いことで交換採点が簡単になり、テストにかかる時間が短くなる。）
 - (イ) できる限り英文で出題する。（1単語1訳で単語を覚える癖をつけない。コロケーションで覚えることにより、定着率を上げる。）

ウ 検証

- ・ 添削プリントは合計40回実施した。初めの頃は、訳語が似ているだけで語法を知らない単語を無理矢理並べただけの英文を書いていた生徒でも、徐々に慣れ、意味内容が伝わるシンプルな英語で表現するようになった。予想以上に自主的に取り組む生徒が多く、効果的だった。実際に書くスピードも速くなったし、英語で表現することは楽しいとの感想も聞かれるようになった。模擬試験でも英作文の得点率は他分野と比べ高かった。ただし、綴りミスや単純な時制ミスなどが相変わらず多いままの生徒も少なからずいた。
- ・ 添削プリントには和訳問題も載せ、全訳させた。単語の意味を知っているだけでは意味内容が正確に読み取れない、いわゆる「構文」が含まれる短文を全訳させた。訳語を適当につなぎ合わせて意味内容を漠然と類推するのではなく、英文の構造を意識し、リズムや意味内容の流れを感じながら英文を論理的に読む姿勢が回を重ねるごとに徐々に身に付いたように思われる。意味内容は大体わかるのにそれを日本語では表現しにくいと述べる生徒もいた。ただし、抽象

レベルが高くなるとお手上げ状態となることもあった。

- ・リスニングは、5月、10～11月、1月の3回、集中的に実施した。センター試験1ヶ月前からは週1回リスニングに重点を置いた授業をした。聞き取りのこつや解説が充実した教材だったこともあり、リスニングを苦手だと答える生徒は徐々に少なくなった。センター試験のリスニングの得点も昨年度の3年生に比べ向上した。
- ・「Word Marathon」では、1，2年次と比べ3年次では生徒の取り組む姿勢が遙かに良くなった。実際、合格率も明らかに向上した。数回再試をしないと合格できなかった生徒でも、1回目の試験で合格するようになった。英語が苦手な生徒でも少なくとも語彙力は以前と比べ着実に向上したと言える。

4 3年間の研究のまとめ

この3年間、担当教員が中心となって英語科全体であれこれアイデアを出しながら様々な取組を行ってきた。生徒にも好評でうまくいった活動もあれば、尻切れトンボのようになんとなく終わってしまった取組もあった。その中で「生徒の語彙を増やすこと」を本校における3年間の研究の最重点項目にした。その中心として月例単語テスト「Word Marathon」を3年間継続して実施した。身近な資格試験のように位置付け、生徒の間でもそれが徐々に浸透していった。「Word Marathon」というネーミングも定着し、2年次、3年次には、点数を競い合って楽しむイベントとなった。「Word Marathon」の1番のこだわりは、合格するまで取り組むことである。英語が苦手な生徒の中には、最初のうちは抵抗感があり取組が極めて悪い者もいた。粘り強く何度も再試を実施することで「Word Marathon」に対する生徒の意識も高くなり、合格するまでやりきる雰囲気は学年全体の中に徐々に生まれてきた。再試を重ねながらも合格することによって達成感を味わい、次のステップへと主体的に進む者が出てきた。ある程度の語彙が定着してくると、「単語の意味がわかるから、長文が読めるようになった」と実感する者も増えてきた。その経験が生徒自ら語彙を増やそうとする姿勢につながった。まだまだ英語は苦手だが語彙力だけは自信があるという生徒も出てきた。空き時間などにも単語帳を開いて、自主的に語彙を増やそうとする姿勢が多く見られるようになった。英語を頑張ろうという学年全体の雰囲気のみならず、英語が苦手な生徒でも自信や意欲が生まれてきたことが今回の研究を通して得た一番の成果だったと思われる。

今後の課題として、いわゆる「使用語彙」を増やすことが挙げられる。「Word Marathon」などを通して「理解語彙」を増やすことはできたが、使用語彙の点では大きな進展は見られなかった。英作添削プリントを通じて、よく使う単語ほど使い方を辞書で確認させることを実施してきたし、単語小テストの読み合わせ時に語法、特に個々の動詞の使い方を意識させコロケーションの形で読み合わせをしてきたが、結果としては不十分なまま終わってしまった。最低限押さえて欲しい最重要基本語彙の語法を一覧にして生徒に提示するなど、何らかの具体的な方策が必要だと思われる。

このプロジェクトで実施した GTEC や質問紙調査のおかげで、3年間生徒の現状を分析し把握することが可能となった。それに基づいて所属学年スタッフ全員で課題を見付け、具体的取組を考え、試行錯誤しながら実行に移してきた。この研究を通し、生徒の現状を客観的に把握し生徒の課題を意識しながら日々の授業行うことができたことは私達にとって大きな魅力であった。このような機会をいただけたことに感謝している。